

# 戦後六〇年にあたって思う

## 市民からの手紙



### 戦後六〇年と私

菊地 一郎

私の戦後を語ろうとすると、どうしても父の出征から話さなければなりません。父の戦死によって精神的にも経済的にも我が家の生活が大きくかわり、その後の私自身の生き方にも大きく影響したからです。

満三三歳にもなった父が赤紙一枚で召集されたのは、敗戦の前年即ち一九四四年五月、私が国民学校（小）三年生のときでした。歳老いた両親、妻と二人の子供を残し後髪を引かれる思いでの出征であったら

うと思います。母と祖母は千人針を作り社寺を参拝してまわり、産土神うぶすまじんにお百度参りまでして武運長久を祈願。祖父はお国のために率先して刀剣から仏壇の燭台まで金属類はすべて供出し、勝利と父の無事帰還を祈ったのでした。

五年前母が亡くなり手文庫から、父の出征の前日に書いた遺書や母あての手紙が出てきました。出征後ただ一回の大阪での面会について、二度とあえないと思つた家族全員にあえた喜びと、両親のこと子供の将来を託す内容の手紙がありました。まさに覚悟の死出の旅だったのだと思います。これが父とあつた最後でした。「散華」などとかっこうよい表現はしがたく、おそらく靖国神社に合祀されて爪弾きされているだろうと思われる手紙でした。当時五歳の弟は戦死を忘れよ

うとしたせいか、父との思い出はほとんどなく、二歳の幼子だった妹は父の記憶がまったくなく墓参りにも父の顔は浮かばないとのことです。

四五年の熱い夏、私はパラチフスにかかり玉音放送どころではありませんでした。敗戦で帰還する兵士もぼちぼちみえ、わが家族はひたすら父の帰りを待ちわびていたのです。しかし敗戦の日の二週間まえ、父はフィリピンのルソン島で戦死していったのです。戦死の公報が入ったのは翌年三月、遺骨もなく、函には紙切れ一枚だったとのこと。子供は見せてもらえませんでした。葬儀は我が家のほか羽茂村の合同葬儀がありました。弟妹はきれいな着物を着せてもらい、大勢の弔問客に喜んで飛びまわり人々の涙をさそったのです。一所懸命神仏の加護にすがっても父は戦死、その後我が家はすっかり信仰心をなくしてお盆の精霊棚さへ作らなくなりました。

働き手をうしなつた我が家は貧しい生活でした。高校のときから奨学金をうけ、大学は奨学金とわずかな送金とアルバイトをしながら卒業、教師の道へ入りました。大学で社会科学を学んだことは私の生きる方向を決定付けました。戦前、命を賭しての反戦運動いわ

ゆる“主義者”の思想ゆえ獄舎につながれ、なお節を守った人達の話に感動し、また戦争犠牲の自分自身の体験から戦争のない貧富・差別のない世の中、即ち真の平和で平等な民主社会の実現のため少しでも役にたちたいと決意したのでした。

戦後六〇年を振り返って、あの侵略戦争が国民にいかにかに大きな犠牲を強いたか、またアジアの人々にいかにかに迷惑をかけたか、まだその傷跡もいやされてないのに世の中はすっかり忘れ去つたように振る舞っています。この頃ますます右傾化し、あの戦争を肯定する論調さへあり、貧富の差は広がる一方、海外派兵や憲法・教育基本法改悪をめざす為政者。戦後の平和と民主主義は風前の灯火になつてきました。貧しくても希望をもつて進めた戦後の民主的改革は今やないがしろにされてきております。

残り少ない人生を、私は真の平和で平等な民主社会実現のために微力ながら努力したいと思つています。憲法第9条、教育基本法改悪阻止こそ当面の目標です。

(佐渡市)